

仙北市の地域医療の現状と課題

～地域住民の医療不安解消に向けて～

仙北市西明寺診療所

所長 市川 晋一



秋田県仙北市

人口 23,835人
 (令和5年3月31日現在)
 面積 1,093.56km²
 (秋田県総面積の9.4%)
 高齢化率 45%
 (65歳以上の人口割合)

■仙北市について

仙北市は秋田県の東部に位置しており、2005年(平成17年)に田沢湖町、角館町、西木村の2町1村が合併し発足しました。また、市内には日本一深い湖である田沢湖、全国的に有名な乳頭温泉郷に玉川温泉、みちのくの小京都と呼ばれ今なお当時の趣を保っている角館の武家屋敷や日本さくらの名所100選にも選ばれた桧木内川堤など秋田県内でも有数の観光地でもあり、JR秋田新幹線の駅も2つ(JR田沢湖駅及びJR角館駅)あることから毎年多くの観光客の方々が訪れております。

■仙北市の抱える課題

本市の課題として最初に思い浮かぶのはやはり少子高齢化となります。これについては全国

的にも問題となっており、1997年(平成9年)に子どもの数が高齢者人口より少なくなったことから盛んにメディア等でも報道がなされ、今では耳慣れた言葉となりつつあります。

とりわけ仙北市はその傾向が顕著であり、高齢化率は令和5年4月1日現在で約45%に達するとともに、少子化も当初の想定より加速度的に進展している状況にあることから喫緊の課題であると言えます。また、これに加え、仙北市は広大な面積を有しており、その広さは東京都の総面積の約半分に匹敵するもので、市民の方々が暮らしている集落も各地に点在している状況にあることから、日常生活には自家用車が必須であるという特徴も有しています。

■市内の医療機関の状況

本市には、市立角館総合病院(198床)と市立田沢湖病院(60床)の2病院があり、また、市立の診療所や開業医の先生方の診療所が13施設あります。

しかしながら、地域の医師不足は深刻で、すべての医療機関に常勤医師が配置されている状況ではないことに加え、医療機関の地域偏在や医師の高齢化、診療所の廃院等の問題もあり、地域の医療提供体制は危機的状況にあります。

特に、西木地区においては、西明寺診療所とその分院にあたる桜木内診療所の2施設しかなく、日々の外来診療、在宅医療、看取り、緩和ケア、社会的処方、地域包括支援、介護施設の嘱託医等さまざまな業務を常勤医師である私1人で行いつつ、毎週火曜日の午後には西明寺診療所から山間部に所在する桜木内診療所へ医師と看護師が移動し、患者さんを診ているものの、冬の悪天候時などは診療所間の移動に往復2時間程度要する場合もあり、効率の悪さ、安全面で問題となっております。

■高齢者を取り巻く環境

本市も他の地域と同様に高齢の患者さんの多くは高血圧症を患っており、また、糖尿病や脂質異常症、喫煙、飲酒、肥満のリスク及び腎不全や脳血管疾患による死亡率も高い傾向にあります。(2022年秋田県健康づくり支援資料集他)

これについては特に雪国に多く見られる高塩分食や野菜・果物摂取量の不足、食の欧米化に伴う脂質エネルギー過多などによる食事バラン

ス不均衡が考えられるとともに、運動習慣については車による移動が多く、特に冬期間は積雪により全体的に低い傾向にあります。

また、近年は地方でも核家族化が進み、地域コミュニティの活動等も担い手不足から持続可能性が危ぶまれる状況にあるほか、新型コロナウイルス感染症の出現により外出や他者との接触が控えられるようになるなど、高齢者が孤独・孤立化する場面が散見されるようになり、社会問題化するケースも耳にするようになりました。

こうした中で地方の農山村地区において、近年路線バス等も赤字区間は廃線となるケースも多く、専ら市民の移動手段は自家用車やタクシー等に限定されていることに加え、高齢ドライバーの免許返納や交通事故も年々増加の一途を辿り、医療機関へ通院する際も自身で運転できず、息子さんや娘さんが仕事に行く時に乗せて行ってもらい、帰宅する際はタクシーを利用する等、経済的負担にも繋がっています。また、体調に変化があった場合でも通院が困難であるため、すぐに受診せず、長期間の処方や1ヶ月分の処方を2ヶ月かけて服用したり、場合によっては治療の中断に繋がるケースもあり、結果として、我慢して悪化する方も増えているように感じます。

■医療 MaaS の導入

こうした状況を踏まえ、本市ではデジタル田園都市国家構想交付金を活用した医療 DX 推進の一環として医療 MaaS を導入のうえ、高齢者等の交通弱者に対する医療サービスの提供を



通じて地域でも安心して健やかな生活を営むことができる環境の整備・構築を目指し、取り組みを進めております。

具体的には、医療 MaaS の車輻に電子カルテシステムやオンライン診療システム、各種医療機器を搭載し、高齢者の自宅等へ看護師が赴き、診療所の医師と医療 MaaS 車輻をオンラインで結び、診療や医療相談のほか、健診等を行うもので、患者さんの状態によっては、市内の市立角館総合病院や市立田沢湖病院に加え、秋田大学医学部附属病院とも連携のうえ、オンラインで症例検討会を行えるシステムも搭載します。これにより市民へ安全で安心な質の高い医療の提供を行える環境の整備を目的とするものです。

特に高齢者の方は健診の受診率も低く、自分は健康だと考えている高齢者が多い（内閣府高齢社会白書他）ことから、初期の段階での受診に至らず気がついた時には重症化しているケースもあり、本市では医療 MaaS を活用し、通常の診療に加え、健診も併せて行うことにより健診受診に対するハードルを下げ、生活習慣病等の早期発見・重症化予防に繋がりたいとの考えに至り導入することとしました。

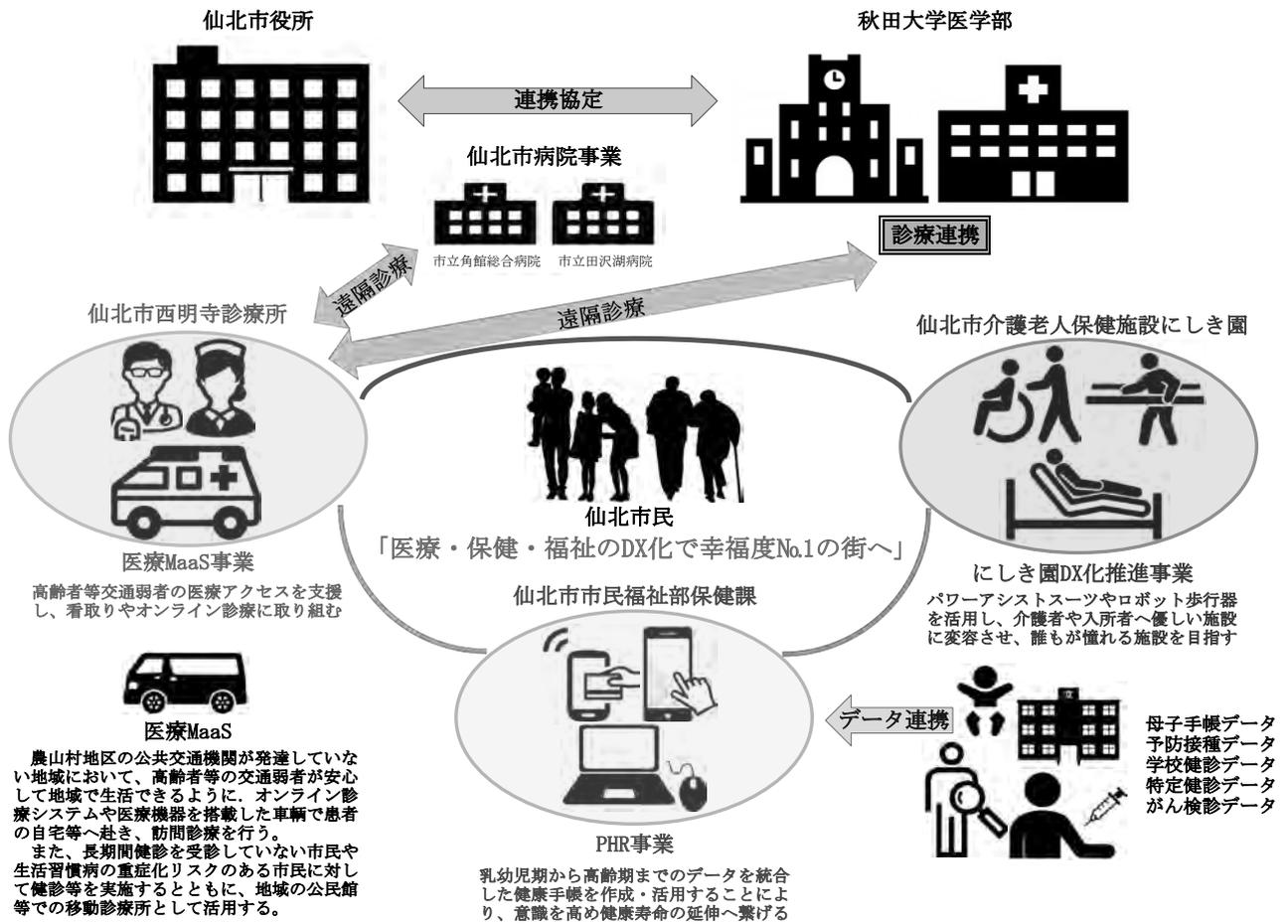
また、医師の視点からも従来、訪問診療のた

めに要していた移動時間が短縮できることから外来診療時間の確保や緊急性の高い患者さんへの対応に充てることも可能となることに加え、患者さんにとっても必要な医療を受けつつ医療機関への通院回数が少なくなることから、医師と患者さん双方の負担軽減にも繋がり近年話題となっている医師の働き方改革にも有効な手段であると言え、医師不足に喘ぐ地域においてはオンライン診療をはじめとした医療分野のDX化を推進し、医療資源や時間の有効活用を図りながら持続可能な医療提供体制の構築を目指す観点からもこの施策は有効であると考えております。

今後、日本は大都市圏を除き、更なる人口減少や高齢化が進むことは避けられず、如何に対応して行くかが求められる時代になっており、ある意味で本市は未来の日本の縮図であるとも言えることから、身近に迫っている高齢化社会問題のトップランナーとして、多様化する高齢者ニーズに対し、医療 MaaS をはじめとした多角的な対応を引き続き検討して行く必要性を感じております。

奇しくも、先日、厚生労働省が離島や山間地といった医療体制が手薄な地域で公民館や郵便局などを医師が常駐しない診療所として開設す

デジタル田園都市国家構想推進交付金事業



ることを特例で認め、地域の身近な場所でオンライン診療を受けることを可能とする制度改正を行う旨の報道がなされました。

本市でも将来的には医療 MaaS を地域の公民館等で診療所として利用することにより、前述した高齢者等の交通弱者への医療提供体制の確保のみならず、地域コミュニティの活性化への効果や災害発生時の緊急時対応にも活用できるものであると考えております。

■仙北市医療 DX 推進事業

仙北市では、前述した医療 MaaS 事業のほか、デジタル田園都市国家構想交付金を活用し

た PHR (パーソナル・ヘルス・レコード) 事業と介護老人保健施設にしき園 DX 化推進事業にも取り組みを進めることとし、これらの施策で地域の活性化と市民の健康寿命延伸に繋げ、幸福度No.1のまちづくりを目指しているところです。

PHR 事業は、妊娠期から高齢期までの健康等に関する各種データを一元的に管理のうえ、可視化することで市民の方々の健康意識を喚起するとともに、日々のバイタルデータや食事・運動等のデータも連携のうえ、AI を用いたアプリで介入を行い食生活を含めた生活習慣の改善に繋げるものです。

また、従来、健康等に関するデータについて

は、各ライフステージで管理・保管している部署が異なり、例えば出産した際の母子手帳データは母子保健担当課、子育て期は子育て支援担当課、小学校入学以降は教育委員会等と散在していたデータを統合することで、生まれて以降の生涯健康手帳を作成し、保健・福祉・医療分野でもシームレスな情報連携が図られるメリットがあります。

介護老人保健施設にしき園 DX 推進事業については、介護者の負担軽減を図り、魅力ある職場とするため、パワーアシストスーツを導入のうえ、腰痛診断アプリ等と連携させることにより、介護従事者の職業病とも言える腰痛症の緩和を目指し、介護職員の離職防止等へ繋げるとともに、介護システムも併せて導入・活用し、記録や情報共有の効率化を進めることとしております。また、入所者にとっては、ロボット歩行器等を活用したフレイル予防にも努めるなどの取り組みを進めつつ、離床センサーや見守りカメラを導入することにより介護者と入所者双方に安心を与える環境を整えるものとなっております。

■地域医療の今後の展望

今後、地方は人口減少と急激な高齢化が進み、それに併せて医療需要も減少することが予想されておりますが、医療は市民の生活になくてはならないものであり、医療のない地域には住民が安心して住むことはできません。

そのような状況の中で、地域医療は今まさに変革の時期を迎えていると言え、医師の臨床研修制度や専門医制度のみならず、認定看護師制

度や特定行為研修制度など医療従事者の専門性が求められる時代になっていることから、都市部の設備が整った病院等に医師、看護師やその他の医療従事者が集まりやすく、地域で生活する住民を見守る地方の病院等では医療従事者の確保が困難な状況にあることから、地域医療こそ DX を推進し、効率化を図りながら慢性的に不足しがちな医療資源の確保に繋げて行く必要があると思われれます。

医療を取り巻く環境は新型コロナウイルス感染症の出現以来、めまぐるしく変化しており、医学の進歩とともに医療関連技術も発展を遂げていることから、地域医療の現場においては、従来の病診連携に加えてこれらの技術を有効に活用し資源不足を補いながら持続可能な医療提供体制を構築することが人口減少社会で求められる地域医療のあり方であると考えます。

プロフィール

市川 晋一(いちかわ しんいち)氏

兵庫県姫路市出身

1976年 秋田大学医学部 卒業

1976年 秋田大学医学部附属病院 泌尿器科研修医

1985年 秋田大学大学院医学系研究科 修了
(医学博士)

1985年 仙北組合総合病院 泌尿器科科長

2000年 西明寺診療所 所長(桧木内診療所長兼務)

現在に至る

主な受賞歴

1994年 秋田県農村医学会学術奨励賞

2013年 秋田県医師会医学奨励賞

2016年 読売新聞社秋田県医療功労賞

2022年 日本医師会赤ひげ大賞

2022年 秋田県文化功労者

2000年に西明寺診療所に赴任してから西木地区唯一の医師として20年以上地域医療に従事している。

西明寺診療所の所在する西木地区は山手線内側の約4倍の面積を誇るが、その多くは森林が占めており、冬の積雪は多いところで2mを超える。西木地区の住民約4,000人の住居は山奥にまで点在するもののバス路線は廃止され、秋田内陸縦貫鉄道沿線の住民以外は日々の移動にも苦慮している。以前より「住み慣れた地域で高齢者の暮らしを支える医療を継続したい。」との思いを抱いていたこともあり、医療 MaaS 事業の構想時点から積極的に関わり、本事業の創設に尽力した。